



「花火つてのは壊れるために生まれてくる。どうせ壊れるならできるだけ美しく壊れてほしい。私の理想はね、夜空に見えるない円があつて、そこへ親星がすつと引く張られるように開く花火。難しいです」

豪快な輝きを支える繊細な日本の技術は、世界に冠たるもの。しかしこれも、今や風前の灯だ。多くの工業製品同様、中国製の安い花火が、日本

の夏の空を席巻している。「安く数さえ上がればいいという花火大会が増えてね。悔しいですよ。いつか中国へ行つて、これが花火だつてやつを見てやりたい」

尺玉の火薬詰め作業を見せていただいた。木製のへらを使って火薬を型枠の中に少しずつ詰め、最後はピンセットで並べていく。熟練の手さばぎで、なめらかに進む作業だが、そ

れでも四重芯なら1日に1個詰めるのがやっとだ。「ノスト?嫌なことを考えると良い仕事ができないんで、忘れるようにします(笑)」

この夏、花火を見る機会があつたら、よく観察していただきたい。数で勝負の不揃いな花火の中に、きつと真円の美しい花が数輪、咲くはずだ。職人の誇りが光となる瞬間を、心の底に焼き付けてほしい。



PROFILE

おばた きよひで

昭和20年、群馬県生まれ。実家は曾祖父の代から続く花火店。幼い頃から父母の花火づくりを手伝う(「ご本人曰く、法律違反だから内緒です」笑)。工業高校化学科を卒業後、老舗・青木煙火店などで修行。平成6年、史上初の、四重芯花火の打ち上げに成功。平成13年、現代の名工に選ばれ、二人の息子さんが跡継ぎとして修行中である。

# 職人の技

シリーズ⑦ 花火職人

(有)菊屋小幡花火店  
小幡清英さん

子供の頃、花火が恐かった。

大きな音で驚かせた後、この世のものとは思えない美しさで開く火の花。見つめていると心を吸われてしまいそう、ときどきギョツと目を閉じた大人になつた今も、花火は怖い。あんなにも多彩な色と形を生み出す技術に畏れを感じるのだ。火薬を操る魔法使い。花火職人を訪ねた。

「一尺玉なら、上げて消えるまで約8秒。花が開いているのは2秒から2秒半。なんだか人の一生みたいでしょ。」

当代随一の花火職人・小幡さんは、花火玉をいとおむむように撫でながら話す。この玉の中に、どんな小宇宙が詰まっているのだろうか。

「玉の中に入っているのは、光と色を作る火薬玉の『星』と、

その星を飛ばす火薬玉の『割り薬』、この2種類だけ。中心から割り薬、星、割り薬、星の順に和紙1枚で仕切られ

詰まっています。いちばん外側の、花火の印象を決める星を『親星』と呼びます。」

筒から打ち上げられると同時に玉から伸びた導火線に火がつき、上がり切ったところで中心の割り薬に点火。解き放たれた星は、光り輝きながら天空に模様を描く。どんな花を咲かせるかは、花火職人次第。火薬玉作りから打上まで、すべてを自ら行うことで、彼らは花火の『美』を『ソフトロル』しているのだ。

「花火の色は、マグネシウムなど金属粉の炎色反応。内側の星は何色で親星は何色だと美しいか、星の個数と大きさをどれくらいにするから、割り

薬の強さはどうしようとかあれこれ考えながら火薬を練っています。計算？しません。全部頭の中です。」

小さな花火なら工場の裏山で試し打ちをするそうだが、大きな花火は実験できない。

続けているうちは、一人前じゃないと思います。」

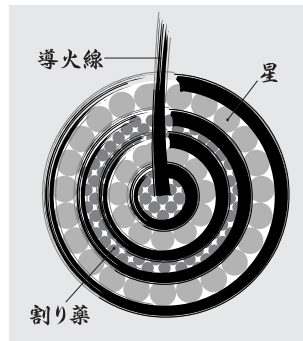
平成6年、小幡さんは史上初めて『四重芯』と呼ばれる、星の層を5つ持った花火の打ち上げに成功した。三重心は戦後すぐの発明だそうだから、

花火は、壊れるために生まれてくる。できるだけ美しく壊れてほしいんです。

新しいものを作ったら、その火薬の配合や星の数、割り薬の量などを覚えておき、実際に打ち上がった花火を見て、よし悪しを確認するしかない。まさに経験勝負だ。

「職人として一応使えるってレベルに、まず10年でしょ。その先は『トルなし』。何かを求めて

新しいものを作らなければ、一重増えるのに実に半世紀。単に破裂するだけの四重芯なら至難ではなかつたろう。だが、小幡さんが目指すのは、真円を描く、品の良い花火。数千個の火薬玉が、すべて自分の思い通りに弾け、広がり、輝くよう、各人は技術を磨き続けています。



文 = 篠塚義成  
text: Yoshinari Shinozuka

写真 = 林 泉  
photo: Izumi Hayashi